ブックレビュー

『ＩＴ革命の虚妄』

森谷政規著（文藝春秋）

最近、連日のようにＩＴという言葉を新聞などで目にするようになった。周知のとおりＩＴは「情報」を表す「Information」と「技術」を表す「Technology」の頭文字を取ったものである。パソコンを中心としたハイテク機器やインターネットなど新しい通信・情報技術が急速に発展、普及し、大きな社会の変化、生活の変化をもたらすということから「ＩＴ革命」ともいわれている。こうしたＩＴ革命を推し進める原動力になったのがパソコンを使ってさまざまな情報を送ったり受取ったりできるインターネットの急速な普及である。郵政省「通信白書」によると、日本全国のインターネットの利用者は一九九九年末に二、七〇六万人と推定されており、前年より一千万人以上の大幅な増加となっている。パソコンの普及に加えてｉモードの急増により携帯電話による利用も大きな比率を占めるようになってきている。

本書では、ＩＴの進展により、情報がモノ、サービスの世界をどう変えるのかを、多くの雑誌・書籍などでＩＴ革命と称されている革命的な事柄をあげて解説している。しかし、ＩＴがもたらすのは良いことばかりではなく、マイナスの面もあることを指摘し、そこを考慮しない議論は無意味であると述べている。

ＩＴ革命の中心は急速に普及しているインターネットであるが、その利用はｅメールとｅ情報が主であり、ＩＴ革命の柱となるｅコマースの利用者はまだまだ少ない。ｅコマースはＢ to Ｂ（Business to Business）つまり企業間取引に向いており、企業間のｅコマースは、低価格での調達あるいは在庫削減といった企業の合理化に資するとしている。しかし流通はかなり合理化されているため、企業間取引はｅコマースによってさらに拡大することはないとし、〝革命〟といわれるほどの大変革が生じるにはＢ to Ｂではなく企業と個人の取引であるＢ to Ｃ（Business to Consumer）の拡大がカギになると述べている。Ｂ to Ｃに向いている具体的な例として、高額商品やサービス、近くの商店では手に入らない商品、また種類が多く次々に新しいものが発売される書籍等を取り上げている。興味深いのは、地方名産等の食品、飲料もその一つであると言っていることであろう。これは消費者のこだわりニーズをとらえたものであり、多品種少量生産という、これまで不利とされていた日本農業の特性をＩＴにより有利にできる可能性があることを示している。

このようにインターネットを使って、単に情報のやりとりだけでなく、モノの売買等も簡単に、しかも国境を超えてできるようになった。しかし、著者は「それでわれわれの生活は本当に豊かになるのだろうか。もの珍しさや利便性だけに目を奪われていると、思わぬところで歪みが生じてくるのではなかろうか」と疑問を呈している。

ＩＴ革命は産業革命に匹敵するともいわれている。しかし、本書では、ＩＴ革命が通信技術の飛躍的進歩という現象を表す言葉に過ぎず、必ずしも万能でないことを主張している。ＩＴはツールにすぎないにも関わらず、ＩＴ化しさえすれば全てがうまくいくという考えは「虚妄」ではないかという著者の主張は説得力を持っている。ＩＴ革命賛美の声が多い中にあって、本書はやみくもにＩＴを批判するのではなく、現状を冷静に分析し、今後の展望を論じたものといえよう。

（二〇〇一年一月、二〇六頁、六六〇円）

（中村光次）